


在外研究員研究報告書

17

2022年6月~~16~~日 受付

所 属	グローバル地域文化学部	氏 名	肥後本 芳男	
職 名	教授			
研究課題名	アメリカ独立革命とアボリショニズムの総合的研究			
研究期間	2021年3月26日～2022年3月26日			
滞在期間 ・滞在地 研究調査先	滞在期間	滞 在 地	研究・調査先	
	12か月と1日	シアトル	ワシントン大学	
研 究 費	306.6 万円	研究成果の概要		別記 4,000字程度
発 表	題 目 名	発表学術誌名 Vol. No.		発行年月日
	著 書 名	発 行 所 名		発行年月日
	演 題	講 演 学 会 名		講演年月日
	“Astor’s Global Emporium and the U.S. Claim to the Pacific Northwest in the Early Republic”	History Department Colloquium, University of Washington		November 15, 2021

2022年6月14日

在外研究員研究報告書

期間： 2021年3月26日～2022年3月25日

於 米国ワシントン大学歴史学部

グローバル地域文化学部 教授 肥後本 芳男



【研究環境と推移】

2021年3月26日、伊丹から成田経由で私はアメリカ合衆国シアトルに到着した。コロナ禍という異例の状況での在外研究であった。色々と渡米準備でせわしない最中に受けなければならなかった渡航前のPCR検査に始まり、現地ホテルでの一定の隔離期間と再度のPCR検査を終えてワシントン大学のキャンパスを訪れるまでのあいだは非常に長く感じられた。また、シアトルの不動産仲介業者のほとんどがコロナ禍で対面での営業を取りやめていたこともあり、賃貸アパート探しは思った以上に難航した。コロナ禍のシアトルでの在外研究の始まりは悪戦苦闘の連続とってよかった。

シアトルでの生活基盤をなんとか整えることができ、4月半ばに私はワシントン大学の歴史学部に着任した。広大で緑豊かな大学キャンパスでは学部長補佐のアレクサンドラと北米都市史の権威ジョン・フィンドレー教授が快く出迎えてくれた。キャンパスの一通りの説明の後で、学部建物の3階にある研究室に案内された。そこには客員教授として赴任した私のために、北米北西部の壁画が描かれた立派な個室の研究室がすでに準備されていた。渡米前には知人から在外研究中の日本人研究者はひとつの研究室を数名で共同利用するケースも少なくないと聞いていただけに、Wi-Fi環境が完備された広い個別のオフィスが一人で自由に使用できたことは、研究環境としてはおおいに恵まれていたといえよう。ワシントン大学の歴史学部には感謝しかない。

歴史学部の教員の研究室は主にスミスホールと名付けられた建物の中にあり、大学の中央図書館にあたるスザーロ・ライブラリーから5分程度しか離れていない好立地にある。住居も何とか決まり、いよいよ本格的に研究開始の状態にまで漕ぎつけたものの、図書館はまだ閉館の状態であった。というのは全米では日本よりも早くワクチン接種が始まったとはいえ、コロナ感染は2021年4月段階では依然として拡大中であり、ワシントン大学としては大学図書館の開館を見合わせる方針をとっていたからである。研究書を借りる際に

は、ウェブサイトから図書館に必要な本をリクエストし、指定された曜日・時間に取りに行かなければならなかった。このようにワシントン大学での在外研究期間の前半は想像以上に困難な研究環境に置かれることになった。

在外研究の前半は、日本からもって来た資料や二次文献に基づきアメリカ独立革命の研究動向を、第二次世界大戦以後の米国を取り巻くグローバルな政治文化の変容の中に位置づける論文の執筆に取り組んだ。私はもともとアメリカ独立革命史研究から研究キャリアを始め、独立革命が及ぼした世界史的な影響に一貫して関心をもってきただけに、今回の論文執筆は自分の研究を振り返る意味でも有意義であった。本論稿では、カウンターカルチャーが席卷するなかで大学院教育を受け博士号を取得したかつての大学院生の多くが、いまや全米各地の大学で教員として中心的な地位を占めており、独立革命史の研究動向にも大きな変化が生まれてきたこと、また冷戦以後の米国のリベラルと保守の政治的な分極化とともに研究の細分化と多様化がよりいっそう加速されてきたことを明らかにし、21世紀初頭のアメリ革命史研究の課題について論じた。

通常ワシントン州では、5月から8月にかけてのサマーシーズンはもっとも過ごしやすい季節である。しかし2021年度の7月上旬は北西部地域で熱波が発生し、一週間ほど華氏110度(摂氏45度)以上の高温が続いた。近隣のカナダのバンクーバーも熱波に見舞われ、日ごろ暑さに慣れていない100名以上の住民が亡くなる惨事が発生した。ワシントン大学でも閉鎖中の図書館や一部の建物を除けば、冷房は完備されていなかったため、研究室での私の執筆活動も一時停滞を余儀なくされた。(ちなみに緯度の高い極西部に位置するワシントン州では真夏でも摂氏30°Cを超えることは稀であり、一般住宅やアパートには一般的にエアコンは取り付けられていない。)このようにシアトルでは予期せぬ色々な出来事に遭遇したものの、夏が過ぎた9月下旬に大学当局は、スザーロ・ライブラリーをはじめキャンパス内の図書館の再開を決定した。こうしてようやく米国で本格的に研究を推進する態勢が整ったのであるが、その時には私の在外研究期間の半分以上が過ぎていた。

スザーロ図書館の運営がほぼ通常に戻ると、在外研究の後半は学術書や史料などにもアクセスしやすくなり、滞米前に計画していた研究課題に正面から向き合うことができるようになった。また、ワシントン大学では歴史学部のコロキウムをはじめ様々な研究会や講演会が企画されており、随時多くの参加案内をいただいた。加えて、ボストン文芸クラブ(Boston Athenaeum)やマサチューセッツ歴史協会(Massachusetts Historical Society)が主催する著名な研究者の講演会や討論会にも時間の許す限りZoomで積極的に参加した。

秋学期以降ワシントン大学では対面授業が再開され、研究会も通常の対面での開催がしだいに増えてきた。冬学期末の3月11日にはスミスホールのフリーマン教室320号で学部学生のHistory Honors Colloquiumが対面の通常形式で開催された。午前から夕方にかけて13名もの意欲的な学生の研究報告が行われたが、各論文の問題関心、議論の骨子と結論が的確にまとめられており、参加者から多くの質問やコメントも出され盛会であった。大学において対面での知的で活発な意見交換の場をもつことが、高等教育の現場には不可欠であることを改めて実感させられた。

【研究課題】

今回の在外研究において与えられた時間が限られていることやコロナ禍で現地リサーチに制限が課せられていることなどを考慮して、私は主要な研究課題を次の3点に絞った。第一に、革命・建国期のアボリショニズム（奴隷制廃止論）がアメリカの政治文化に及ぼした影響を具体的な文献や史料をもとに再考すること、第二に太平洋北西部の毛皮貿易の盛衰がオレゴンの領土問題にどのような関連をもったのかを歴史的なコンテキストに位置づけることの2点であった。くわえて第三として、日本の学会や科学研究費の共同研究グループから依頼を受けた研究報告の準備や論文執筆などの仕事を在外研究期間中にこなすことに専念した。

【研究の進捗状況】

具体的な研究活動としては、滞米中に3回ほどの研究報告を行った。まず、アメリカ研究所の第1部門研究：「被抑圧者たちの抵抗と再生ーアメリカにおける歴史記憶と文学表象」の第3回研究会において、「旧北西部領土へのアボリショニズムの浸透と抑圧ーイリノイ州を事例に」（2021年7月24日）と題する発表を行った。この報告では、オハイオ川を隔て奴隷州のミズーリと対峙していた南イリノイ州の州境地域は自由州でありながら現実には黒人奴隷が持ち込まれており、奴隷制をめぐる議論は住民にはきわめてデリケートな問題となっていたことを指摘した。さらに1820年代から増加した移民やアボリショニストたちの中西部への進出が急速にコミュニティ内の住民の緊張と対立をもたらしていたことを明らかにした。現在は1830年代半ばの人種暴動と反アボリショニズム暴動の歴史的意味を掘り下げるとともに、1837年11月にイリノイ州オールトンで起きたアボリショニスト機関誌発行人ラヴジョイの殺害事件が反奴隷制運動に与えた衝撃について研究を継続中である。

第二にワシントン大学歴史学部とジャクソン・スクール・オブ・インターナショナルスタディーズ共催のコロキウムにおいて“Astor’s Global Emporium and the U.S. Claim to the Pacific Northwest in the Early Republic” (November 15, 2021)と題する研究報告を行った。報告では、太平洋岸北西部の毛皮貿易が18世紀末から19世紀初頭にかけてグローバルな商業網の拡大に寄与したことを複数のデータを用いて概観し、さらに北米極西部に位置するオレゴンの領有権をめぐる国際紛争の経緯とその歴史的な意義について一次資料に依拠して論証した。コロナ禍で資料収集の制約があるなか、報告原稿を準備するのにかなりの時間を要したが、歴史家のみならず政治や経済学の分野から多くの参加者があり盛会であった。Q&Aでは思いもかけない視点からの鋭い質問などもあり、どう応答してよいか難しい質疑やコメントも受けたが、きわめて有益な時間を過ごすことができた。ワシントン大学に限らず米国の大学で客員研究者を含め学内の教員間で知的なコミュニティを構築し、維持するための仕組みがうまく設けられていることを知る貴重な経験となった。翻って同志社大学では担当授業に加えて年々各種会議や学生対応の雑務が増加傾向にあり、学部内での教員間の知的な交流はめっきり減ってきている。本学を真に国際的な競争力をもった大学に転換しようとするならば、専門的な事務職員を増加しアドミニストレーションの強化を図るとともに、教員と事務組織の役割分担を効率的に見直すべきではないかと感じた。業務を簡素化し教員に時間的余裕を与え、研究と教育に専念させるアカデミックな環境を整えることが急務であろう。

第三の研究報告として科学研究費基盤(B):「抗争と粛清のアメリカ」—19世紀米国ポピュリズム史研究会において「19世紀メディカル・ポピュリズムの盛衰—反権威主義とトムソニアニズム」(2021年12月18日)と題する研究報告を行った。この報告では、1820年代から50年代にかけてアメリカ合衆国で全国的に躍進した、正規医療に抗する代替療法としてのトムソン療法の広がりをもとにポピュリズムの視点から再検討した。アメリカの建国期にはボストンやニューヨークなどの主要な港湾都市で医学校が設立され始め、正規の教育を受けた医師たちは各地で医師協会を結成し、医学・医療の専門化・独占化を図った。だが当時の医学は治験データを駆使して個別の疾患に有効な治療を施すものではなかった。正規医師のあいだでは古典的な体液均衡理論に基づくホリスティックな治療が主流であり、高価な治療費に加えて、正規の医師による危険で効果の乏しい治療法は、民衆から懐疑的な目を向けられることになった。こうした医療状況下で多くの患者を獲得したのが、サミュエル・トムソンを指導者と仰ぐ薬草療法(トムソン療法)であった。

トムソンの医療法は、当時の市場革命の波に乗って東部から中西部へと瞬く間に広がり、正規医学の正統性を脅かすまでになった。民衆が正規医師による医療の独占に異議を唱える一方で、患者自身の判断で自らの身体をコントロールできると説くトムソン療法は、アンテベラム期アメリカのポピュリズムを特徴づける文化現象の一部でもあった。本報告では、トムソニアン主義が19世紀のアメリカの医療文化にとどまらず、個人主義的で平等主義的なアメリカ特有の文化の形成に及ぼした影響について言及した。

報告後の質疑応答では、メディカル・ポピュリズムという用語は定着しているのか、トムソン主義が急速に中西部に広がった要因は、いったい何だったのか、医者と患者の平等主義的な今日のアメリカの医療文化が19世紀アンテベラム期に形成されたとみてよいのか、など様々な角度から質問が出され、研究会では活発な意見交換がなされた。

【研究成果】

次に具体的な研究成果としては、論文3本とアメリカ史のテキストの草稿執筆を終えることができた。まず、「海のグローバル循環」研究会の成果として、論文「アメリカの広東貿易の開始とアストリアー太平洋北西部沿岸の領有権をめぐる帝国抗争」を執筆した。本論稿は、2022年度中に関西大学出版会から刊行される予定である。つぎに、中・四国アメリカ学会50周年を記念する論集企画に「21世紀初頭の『建国の父祖』ブームとアメリカ革命史研究の軌跡」と題する論文を寄稿した。この論稿は論集第一部の第一章として掲載され、2023年3月に彩流社から出版される予定である。また、論文「ジェファソン研究と文化戦争ー建国の父祖の試練」を在外研究中に脱稿しており、現在学術雑誌に投稿する準備を進めている。

【在外研究の総括】

この10年間、新設学部の立ち上げと授業や新任・昇進審査などの業務に忙殺されて自分の研究とじっくり向き合う余裕がなかったので、このたび1年間の在外研究の機会をいただくことができ、深く感謝している。新しい環境に身を置き、自分の研究の立ち位置を客観的に再確認できたことは、たいへん貴重な時間であった。在外研究の後半になってようやくコロナ禍の収束期を迎え、各地の図書館や歴史協会へのアクセスが可能になったこともあり、本音を言えば、もう半年ほど滞米を延長し史料などの閲覧・収集を集中的に行いたかった。残されたリサーチ課題は今後夏休暇などに渡米して継続していきたいと考えている。

報告書の総括として今回の滞米生活で痛感したことを記しておきたい。1980年代に日本経済が躍進し、急速に縮まった感のある日米の経済格差であるが、21世紀に入って再び格差が拡大しつつあることを1年間シアトルで生活してみて実感した。渡米前までは為替レートは1ドルが108円前後を保っていたものの、2021年の冬から春にかけてしだいに円安が進み、いまや130円台半ばを超えつつある。短期間に異常とも思える為替レートの変動に加え、米国の主要都市での近年の家賃の高騰と物価高によって、限られた期間に滞米生活を送る日本人研究者にはかなり不利な状況が発生している。また滞米中のリサーチ旅行では、研究費からの調査地への旅費は捻出できるものの、ホテルでの宿泊・滞在費は認められないなど理不尽な制約が課せられている。各地のアーカイブや古文書館などで広範囲のリサーチを計画する研究者にとって、せっかく自らが獲得した科学研究費をそのために使用できないのは、研究活動の足かせになりかねないと危惧する。

ともあれ、コロナ禍の厳しい状況下で1年間の在外研究を大過なく全うし、無事帰国できたことに安堵している。在外研究で得た経験と知見を今後の同志社での研究と教育にできる限り還元していきたいと考えている。最後に、滞米中に適宜助言を与えてくださった研究支援課と学部事務室の皆様にご心より感謝を申し上げたい。